

## 夫を「仏さま」と拝めたとき、 転換した私の心。

千代田中央教会 川上育慧さん

川上育慧さんは、23歳で埼玉から八丈島に嫁ぎ、2人の娘を授かった。順風満帆と思えた生活が一転、夫の飲酒が深い亀裂を生む。過度の飲酒で身体を壊し、仕事にも支障をきたす夫との諍いが絶えなくなる。そんな生活に限界を感じてきた頃、知人から「あなたを苦しめているご主人は、あなたにとって仏さまなのよ」と諭されるが、素直に受けとめられなかった。ついには食道に瘤ができ、肝硬変に。ある日、夫の「おれは、このまま死ぬのかな」という言葉に冗談で応えると、久しぶりに夫婦で笑いあった。そのとき、夫の目に光る涙を見て、「こうした心安らぐ会話を欲していたのだ」「鬼の心でぶつかれば鬼の心が返ってくる」と気づく。しかし数日後、突然夫は他界。後悔の念にさいなまれた育慧さんは、その生と死に思いをめぐらし、ようやく「主人は仏さま」の言葉が心に落ちた。いま、人さまを「仏さま」と拝み、慈悲や感謝の心の積み重ねる毎日が続いている。それこそが、亡き夫への供養になると信じて。



## 「生きている！」という実感

私たちはふだん、朝起きてから夜眠りにつくまで、漫然と時をすごすことがままあります。おそらくほとんどの人が、自らの行動をあまりよく気に留めないまま三日を送り、また当たり前のように翌日を迎えます。そのことで何か大きな不都合があるわけではありませんが、ただ、昨今「生きている実感や喜びがわからない」「生きている意味がわからない」といった言葉を聞くにつけ、漫然とすごしがちな日常の中で、何が生きている実感や喜びにつながるのかを考えさせられるのも事実です。

仏教では「いま・ここ」を大事にします。いま命あることの有り難さを知り、感謝して生きるところに幸せがあります。それはもちろん、心のもち方しだいでいつでも味わえるものですが、私たちはどちらかというと、つらく苦しい体験を経て感謝にめざめ、幸せを知ることになるのです。しかし、ほんの少し自分の「いま・ここ」に心を向けて観察すれば、生きている実感として、喜びと感動を味わえるのです。

# 立正佼成会